

クエゾノ遺跡3

—第5次調査報告—

2022

福岡市教育委員会

クエゾノ遺跡3

—第5次調査報告—



遺跡略号：KEZ-5

調査番号：1950

2022

福岡市教育委員会

序

福岡市は玄界灘を介して大陸・半島と一衣帶水の関係にあり、古代より双方の交流が絶え間なくおこなわれてきました。市内には埋蔵文化財をはじめとした重要な文化財が数多く残されており、近年の著しい都市化により失われるこれらを後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は、宅地造成に伴うクエゾノ遺跡第5次発掘調査について報告するものです。この調査では古墳の石室などを検出するとともに、弥生土器や古墳時代の須恵器、玉類などが出土しました。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、照栄建設株式会社をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和4年3月24日

福岡市教育委員会
教育長 星子 明夫

例　言

1. 本書は福岡市教育委員会が早良区梅林7丁目の宅地造成に伴い、令和元（2019）年11月25日から令和2年（2020）2月14日に発掘調査をしたクエゾノ遺跡第5調査の報告書である。
2. 遺構の実測・写真撮影は加藤良彦・三浦萌が行った。
3. 遺物の実測は神啓崇・棚町陽子・久富美智子・三浦が行った。
4. 遺物の写真撮影は三浦が行った。
5. 製図は神・三浦が行った。
6. 本書に掲載した方位はすべて磁北である。
7. 本書に掲載した座標は世界測地系である。
8. 本書に使用した遺構略号は、S C = 穴住居、S D = 溝、S P = 柱穴（ピット）、S T = 墓柏、S X = 不明である。
9. 本書に関わる図面・写真・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される。
10. 本書の執筆は石室出土遺物の鉄器項目を神が、それ以外の項目及び編集を三浦が行った。なお執筆にあたり加藤氏から助言をいただいた。

遺跡名	クエゾノ遺跡	調査次数	5次	調査略号	KEZ-5
調査番号	1950	分布地図図幅名	75 重留 84 西油山	遺跡登録番号	0260
申請面積	685.19m ²	調査対象面積	685.19m ²	調査面積	208.316m ²
調査期間	令和元年11月25日～令和2年2月14日			事前審査番号	30-2-275
調査地	福岡市早良区梅林7丁目145				

本文目次

I.はじめに	1	古墳時代	7
1. 調査に至る経緯	1	1) 6号墳	7
2. 調査の組織	1	2) 溝	13
II. 遺跡の立地と環境	2	3) 竪穴住居	17
III. 調査の記録	4	4) 壺棺	17
1. 調査の概要	4	古代・中世	17
2. 基本層序	6	1) 焼土坑	17
3. 遺構と遺物	6	2) 不明遺構	19
弥生時代	6	その他	19
1) 竪穴住居	6	1) 土坑	19
2) 溝	6	2) 包含層出土遺物	19
IV.まとめ	20		

挿図目次

図1. 周辺遺跡分布図	3	図15. 溝 (SD021・028)	16
図2. 調査区位置図 (1/500)	4	出土遺物実測図 (1/3)	16
図3. 遺構配置図 (1/160)	5	図16. 竪穴住居 (SC014、SC061)	18
図4. 調査区土層図 (1/50、1/40)	7	遺構実測図 (1/40)	18
図5. SC066実測図 (1/30)	8	図17. SC014出土遺物実測図 (1/3)	19
図6. SC066出土遺物実測図 (1/3)	9	図18. ST028遺構実測図 (1/20)	20
図7. SD002出土遺物実測図 (1/3)	10	図19. ST028出土遺物実測図 (1/6)	21
図8. 石室実測図 (1/40)	11	図20. ST028出土玉類実測図① (1/1)	22
図9. 石室1面・2面実測図 (1/40)	12	図21. ST028出土玉類実測図② (1/1)	23
図10. 石室土層図 (1/30)	13	図22. 焼土坑 (SK003、SK012、	
図11. 石室出土遺物実測図 (29-41:1/3、42:1/5、43は実寸)①	14	SK024) 遺構実測図 (1/20)	25
図12. 石室出土遺物実測図②	15	図23. SX011土層図 (1/40)	
図13. I区調査区中央付近ベルト 土層図 (1/40)	16	出土遺物実測図 (1/3)	26
図14. SD077土層図 (1/30)	16	図24. SK082土層図 (1/30)	26
		図25. その他遺構出土遺物実測図 (1/3)	26
		表1. ST029出土玉類実測表	24

図版目次

図版1 1. 調査区I区全景 (北より)	2. 調査区I区全景 (南より)
図版2 1. 石室1面 (西より)	2. 石室2面 (西より)
図版3 1. 石室完掘 (西より)	2. 調査区II区全景 (北より)
図版4 1. ST029 (南より)	2. ST029出土玉類
図版5 1. 調査区中央ベルト	2. SC066 (南から)
4. SC061 (西から)	3. SC014・SD015 (北から)
	5. SK082 (北東から)

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

平成30（2018）年12月25付けで、福岡市早良区梅林7丁目145（敷地面積：685.45m²）における宅地分譲に伴う埋蔵文化財の有無についての照会が、照栄建設株式会社より福岡市教育委員会宛てになされた（事前審査番号：30-2-929）。

これを受けた経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地であるクエゾノ遺跡に含まれていることから、平成31（2019）年3月28日、及び令和元（2019）年7月18日に工区内の一部において確認調査を実施した。調査の結果、南側の現地表下40cm、北側の現地表下130cmにおいて遺構を確認した。そのため申請者と協議を重ねた結果、保護層を確保できない南側と駐車場とするために切り下げられる範囲を対象として発掘調査を行うことになった。

本調査は令和元（2019）年11月25日～令和2（2020）年2月14日まで行い、報告書作成の整理作業は令和2・3（2020・2021）年度に行なった。

2. 調査の組織

調査委託：照栄建設株式会社

調査主体：福岡市教育委員会

（発掘調査：令和元・2年度）

調査総括：	経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課 課長	菅波正人
	同課調査第2係長	大塚紀宣
庶務：	文化財活用課管理調整係	松原加奈枝
事前審査：	埋蔵文化財課事前審査係	山本晃平
調査担当：	埋蔵文化財課調査第2係文化財主事	加藤良彦 三浦 萌

（整理・報告：令和2・3年度）

整理・報告総括：	経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課 課長	菅波正人
	同課調査第2係長	藏富士寛
整理・報告庶務：	文化財活用課管理調整係	松原加奈枝（令和2年度） 井手 瑞江（令和3年度） 内藤 愛（令和3年度）
整理・報告担当：	埋蔵文化財課調査第2係文化財主事	三浦 萌

II. 遺跡の立地と環境

クエゾノ遺跡は油山から派生する標高22～40mの丘陵上に位置しており、室見川の支流である油山川の東岸に位置する。丘陵は北側へと伸長しており、その丘陵上には飯倉A～H遺跡が存在する。飯倉A～H遺跡では弥生時代を中心とした集落が発見されている。クエゾノ遺跡と油山川を挟んで西側には野芥遺跡が存在する。弥生時代後期の遺構が発見されており、後期後半での一時断絶を経て古墳時代初頭になると再び遺構が多くみられるようになる。また周辺には古墳が多く分布しており、前述した飯倉H遺跡には全長27mの前方後円墳である梅林古墳が存在する。他にもタカバン塚古墳を含む駄ヶ原古墳群や、当遺跡のすぐ南側には影塚古墳群が存在する。

クエゾノ遺跡は中国式の三稜銅鏡が表採されており、今までに四度の調査が行われている。遺跡の中央からやや南東で行われた第1次調査では古墳が五基発見された。1号墳は古墳時代中期の推定前方後円墳であり、主体部は第一主体部である石蓋木棺墓と第二主体部である箱式石棺である。後者からは成年女性の人骨が発見されている。また墳丘を掘り下げる際に壺棺が発見されており、中からは小児から若年と思われる人物の歯牙が発見された。2号墳は円墳であり、主体部は破壊をうけていたため復元是不可能であった。3号墳も近世のカクランを受けていたため、主体部の復元は不可能であった。4号墳は全長3.3mで、幅50～60cmの細長い石室を主体部にもつ。5号墳は径7.6～8.0mの円墳であり、幅広の石室を主体部にもつ。3号墳以外のいずれからも鉄製品が出土している。また箱式製鉄炉などの製鉄関連遺構が発見されており、5号墳で発見された鉄製鍛冶具などとあわせてこの地域で製鉄が行われていたことがわかる。2次調査は遺跡の中央からやや北で行われており、古墳時代後期～飛鳥時代の堅穴住居や、古代の溝と掘立柱建物が発見されている（年報Vol.21）。3次調査は遺跡の南端で行われ、中近世の溝が発見された（年報Vol.25）。4次調査は遺跡の中央からやや南西、一次調査区より西へ約110mの位置で行われた。中世前期の方形区画や、飛鳥時代末期～奈良時代前期の円面硯が出土している。また弥生時代中期～後期の掘立柱建物が多く発見されている。なかでも4間×8間の後期の超大型建物が検出されるなど、当該地域における弥生時代の集落の存在が明らかとなっている。今回の調査区は第1次調査と第3次調査のほぼ中間点に存在する。

【参考文献】

- ・福岡市教育委員会1995『クエゾノ遺跡』
- ・福岡市教育委員会2018『クエゾノ遺跡2』

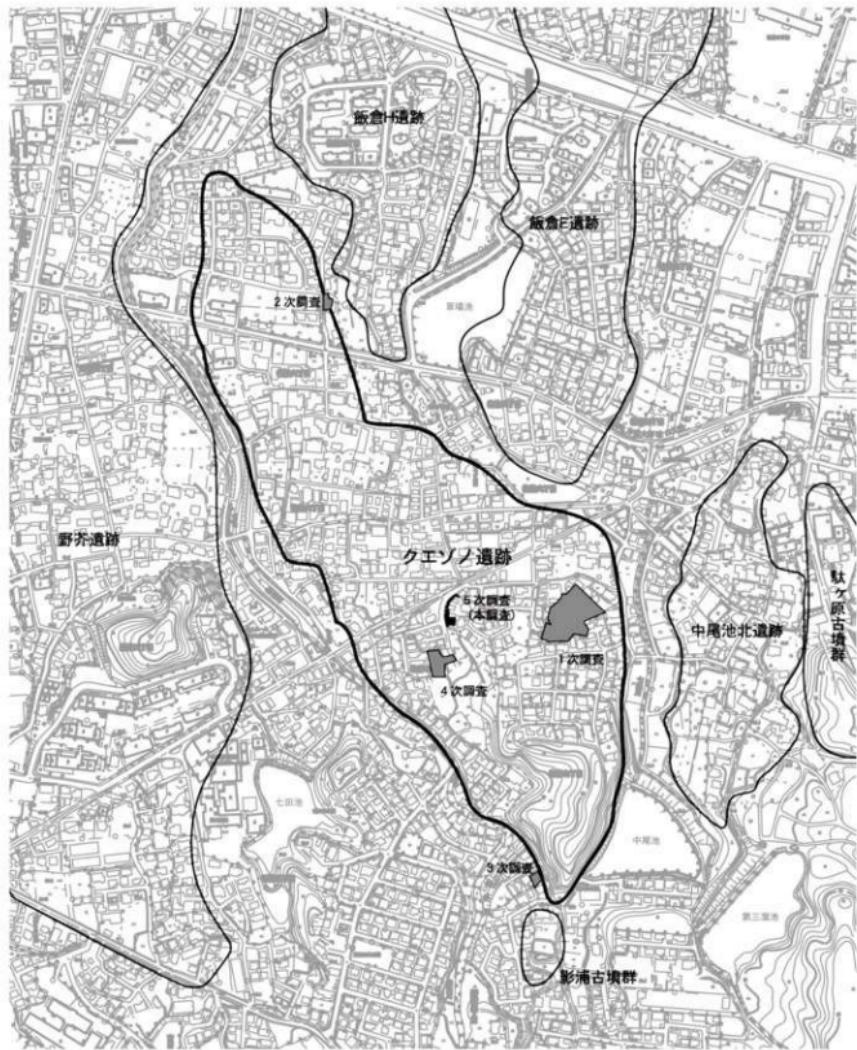


図1. 周辺遺跡と過去の調査区位置図 (1/5000)

III. 調査の記録

1. 調査の概要

今回報告するクエゾノ遺跡第5次調査区は、早良区梅林7丁目145番に所在している。クエゾノ遺跡の中央部に位置しており、南部で第3次調査が行われている。また南東部で行われた第1次調査において古墳が五基発見された。

発掘調査は、保護層を確保できない範囲と切り下げを行う範囲の合計220m²を対象とした。廃土処理と発掘調査範囲の関係上、調査区を2分割して行っている。南側をI区、北側とII区とした。I区では地表面から東部の浅いところで約40cm、西部の深いところで約60cm、II区は約1m前後で遺構面が確認された。この上面までの表土の鏟取りを行った後、人力で遺構の検出及び掘削、遺構実測、写真撮影を行った。またI区調査中に調査区北端において石室の一部が検出されたため、協議の結果、全体を調査するために北側へ調査区を拡張している。発掘調査は令和元年1月25日に開始し、令和2年2月14日に終了している。

本調査区で検出された遺構は主に弥生時代中期の竪穴住居址1軒、溝1条、古墳時代中期の石室、製鉄炉廐棄土塗1基堅穴住居址2軒、溝2条、古墳時代初頭の壺棺1基、古代の焼土坑3基、その他不明遺構やピットなどが複数である。

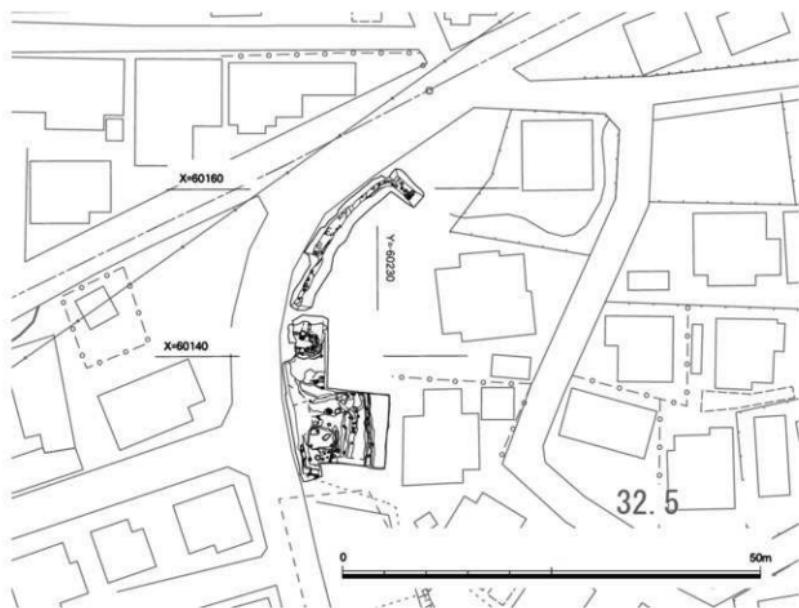


図2. 調査区位置図 (1/500)

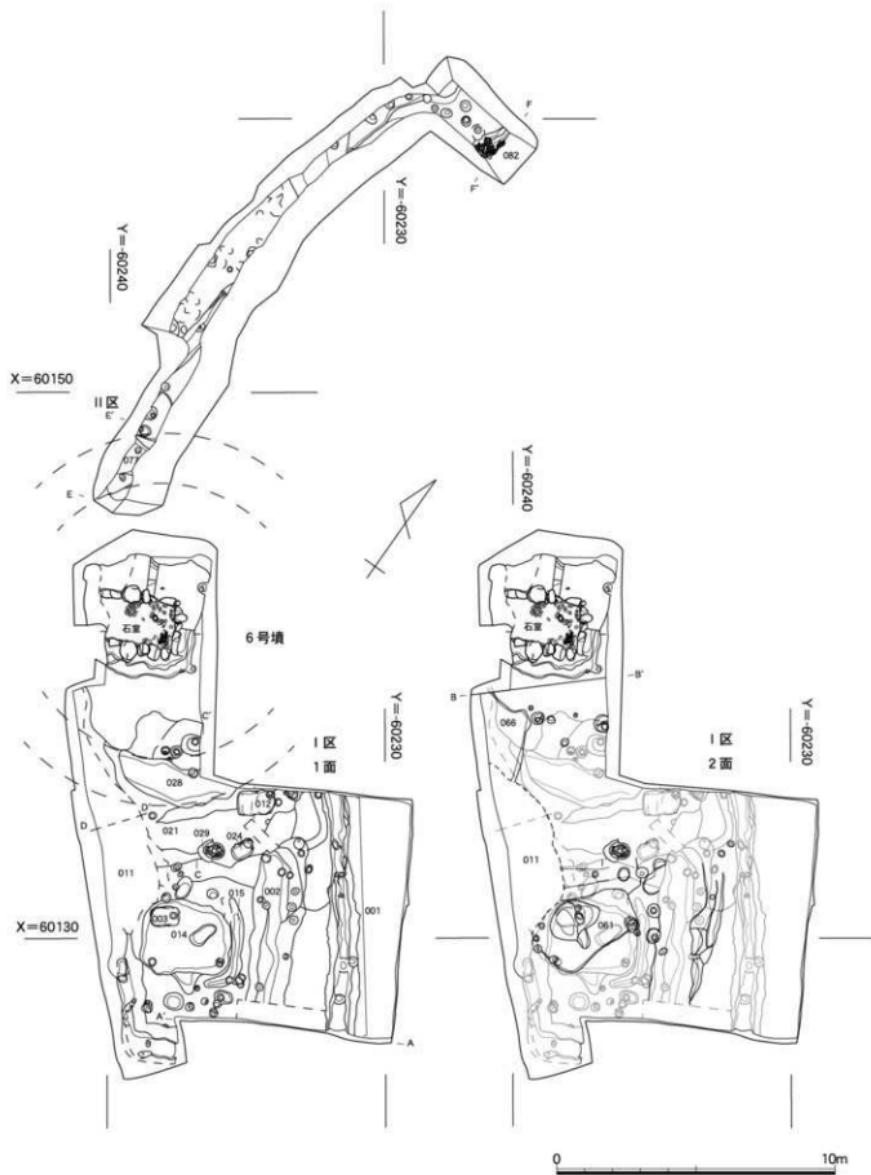


図3. 遺構配置図 (1/160)

2. 基本層序（図4）

調査開始時の現地表高は33m前後である。調査区のI区東半部では約30cmのカクランを掘り下げると遺構検出面である花崗岩風化土壌もしくは明褐色土のバイラン土に達する。西半部からは中世の堆積と考えられる包含1層が堆積する。包含2層は古墳の整地層下で検出され、また弥生時代の住居址であるSC066にきられていことから弥生時代中期以前の堆積であると考えられる。II区では包含1層下から遺構検出面が検出され、包含2層の堆積は調査範囲内では確認できなかった。

3. 遺構と遺物

弥生時代

1) 竪穴住居

SC066（図5）

I区の西端において発見された方形竪穴住居址の一部である。残存長辺2.19m、残存短辺1.74m、深さ18~30cm。標高31.8~31.6mで弥生土器がまとまって出土した。出土状況は図版5の4を参照されたい。時期は弥生時代中期と思われる。

出土遺物（図6）

1~4は甕の口縁部片である。1は口径30cm、残存高6.5cm。外面調整はタテハケ。2は口径26cm、残存高6.0cm。外面調整はタテハケ。3は口径29.4cm、残存高10.5cm。外面調整はタテハケ。4は口径31.5cm、残存高7.0cm。外面にわずかにタテハケが残る。5・6はおそらく甕の底部である。5は底径8.8cm、残存高3.0cm。6は底径8.5cm、残存高9.5cm。7は小型の甕である。口径13.5cm、底径6.5cm、器高12.8cm。焼成はやや不良であり、口縁部に対角線上に相対するように2つずつ、計4個穿孔されている。8~10は高環の脚部である。8は脚部の中央分のみの残存である。残存高11.8cm。摩滅気味ではあるが、外面には縱方向のミガキが施されており、丹塗りされている。黒斑が残る。9は底径18.1cm、残存高15.4cm。外面は摩滅気味ではあるが、縱方向にミガキが施されており、丹塗りされている。10は底径11cm、残存高8.8cm。外面は摩滅しているものの、ミガキ痕が残り、丹塗りされている。内面は底部付近に工具による横方向ナデが残る。

2) 溝

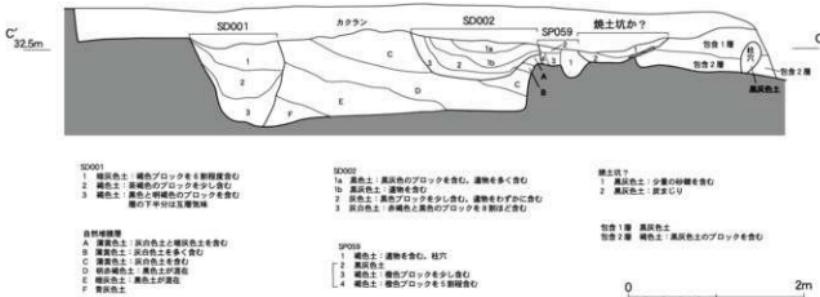
SD002（図3・4）

I区の東部を南から調査区中央付近まで走る溝である。幅約1.5cm、深さ0.45cm。1層を中心に弥生時代中期の土器が出土した。土層図は図4を参照されたい。

出土遺物(図7)

11~21は1層から発見された。11は甕の口縁部である。口径32cm、残存高6.9cm。摩滅や剥離により内外面の調整は不明。12・13は須玖式の甕の頸部から口縁部である。12は口径23cm、残存高7cm。内外面は摩滅しており調整は不明瞭ではあるが、一部ナデが残る。口唇部はヨコナデ調整か？13は外口径22.6cm、内口径15.4cm、残存高9.2cm。内外面は摩滅しており調整は不明瞭ではあるが、一部にミガキが残る。14~16は複合口縁甕の頸部から口縁部である。14は口径9.1cm、残存高6.2cm。内外面共に調整は摩滅。15は口径8.1cm、残存高4.95cm。内外面共に調整は摩滅。16は口径9.1cm、残存高4.1cm。内外面共に調整は摩滅。17は小型の甕である。口径10.1cm、残存高3.4cm。口唇部に穿孔をしており、外面は丹塗りがされている。22~27は2層から発見された。22は複合口縁甕の口縁部である。

I区調査区南壁土層図



I区調査区 土層図

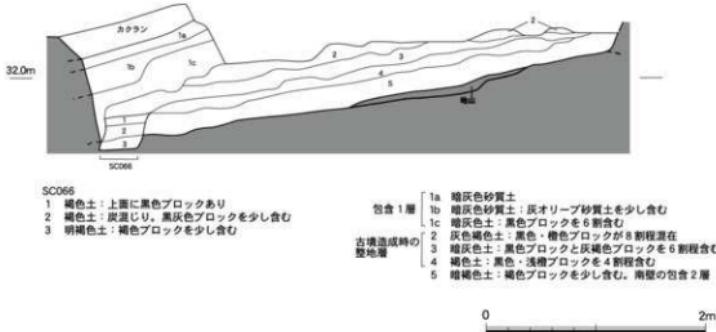


図4. 調査区土層図 (1/50、1/40)

内外面の調整は摩滅により不明。2・3・2・4は甕の口縁部である。2・3は内外面ともに摩滅のため調整は不明。2・4は外面にタテハケが施されている。2・5・2・6は甕の底部である。2・5は底径8.0cm、残存高5.7cm。内面の底部とその付近にナデが残る。2・6は底径8.6cm、残存高3.5cm。内面にナデが残る。2・7・2・8は同一個体になると思われるもので、小型の甕（もしくは壺）である。口径14cm、底径6.5cm。口唇部に2ヶ所穿孔されており、対角線上に対でもう一組あったと推測される。外面調整は摩滅により不明だが、内面の底部付近には工具によるナデ調整がみられる。

古墳時代

1) 6号墳

I区の北端において発見された古墳である。調査開始の段階では南側の側石、および石室内の3分の1のみ調査範囲内にかかっていた。協議の結果、石室全体を把握するために調査区を北へ拡張している。

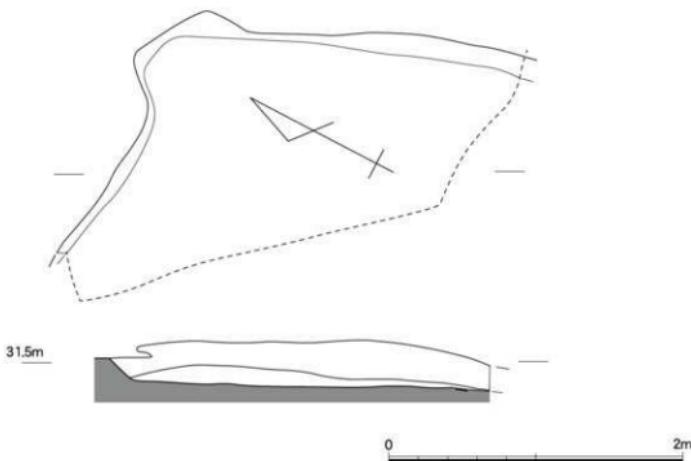


図5. SC066実測図(1/30)

石室土層図(図10)から判断すると、墳丘は中世の段階で削平されたものの2~4層で盛土が一部残存する。SD028とSD077を周溝と仮定すると、外縁で径12mの円墳となる。主体部は横穴式石室である。

石室(図8・9)

規模は長軸2.16m、短軸1.36m、主軸方向はN-68°-E。羨道部は削平されて残っていない。壁体が2段のこっており、高さ約54cm。花崗岩とみられる自然礫を主体とし、腰石は低く小さく古い形態をとる。2段目も小さく扁平気味な礫を小口に積む。およそ左右対称になるように組まれており、2段目の奥壁から数えて4番目には他のものに比べて丸く巨大な石を配置している。床面は花崗の小礫で2面の敷石がなされている。2面目の敷石は残存状況が悪かったが、須恵器が奥壁側でまとまって出土している。1面目は敷石の残存状態がよく、北東部以外はほぼ残っていた。2面目と対照的に遺物はほとんど見つかっていない。1面と2面あわせて須恵器や鉄器が出土している。また2面から1面へ掘り下げている途中で金環を1つ発見した。

出土遺物(図11・12)

29~42は石室1面で発見された須恵器である。29~35は杯蓋である。29は口径14.2cm、器高6.0cm。30は口径13.8cm、器高5.8cmである。29・30の内外面調整は回転ヨコナデであり、内面の天井部はナデ、外面の天井部付近は回転ヘラケズリが施されている。つまみ部周辺は回転ヨコナデである。重ね焼きの痕跡しきものが一周しており、全体が灰かぶりである。31は口径12cm、器高3.7cm。内外面調整は回転ヨコナデであり、内面の天井部はナデ、外面の天井部付近は回転ヘラケズリが施されている。つまみ部周辺はナデである。32は口径14.1cm、器高6.8cm。内外面調整は回転ヨコナデであり、内面の天井部はナデ、外面の天井部付近は回転ヘラケズリが施されている。つまみ部周辺は回転ヨコナデである。

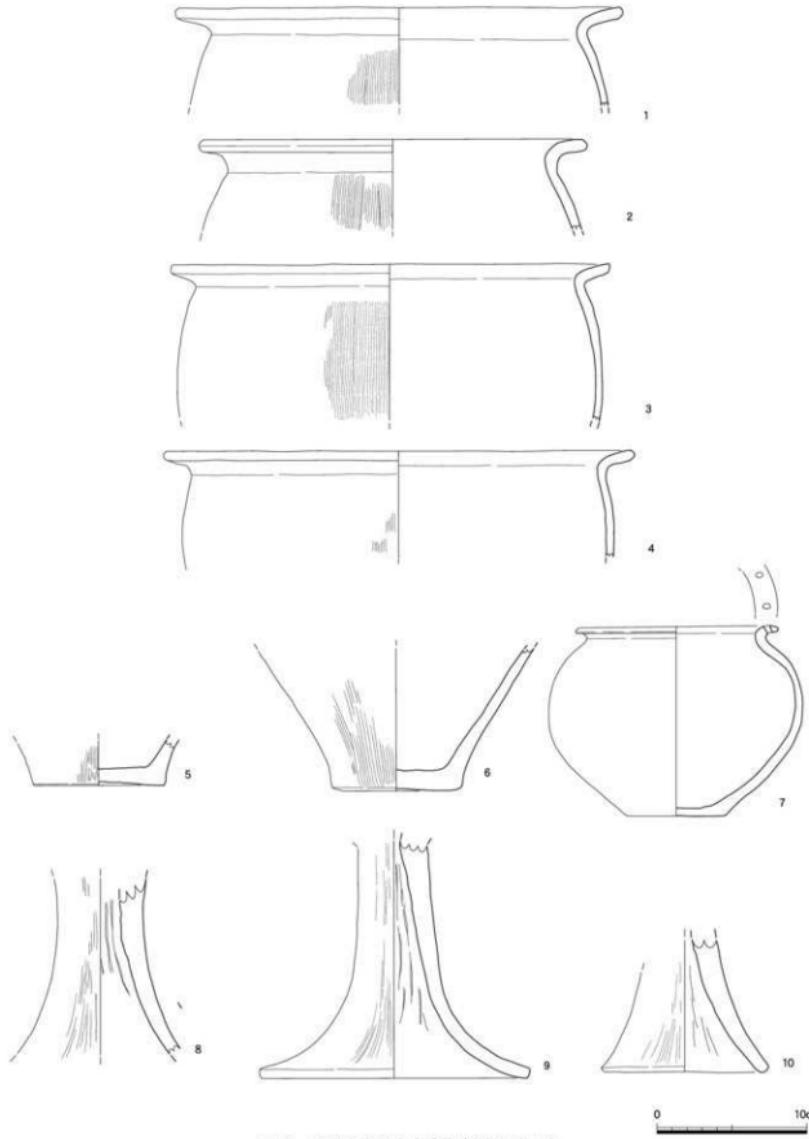


図6. S C O 6 6出土遺物実測図 (1/3)

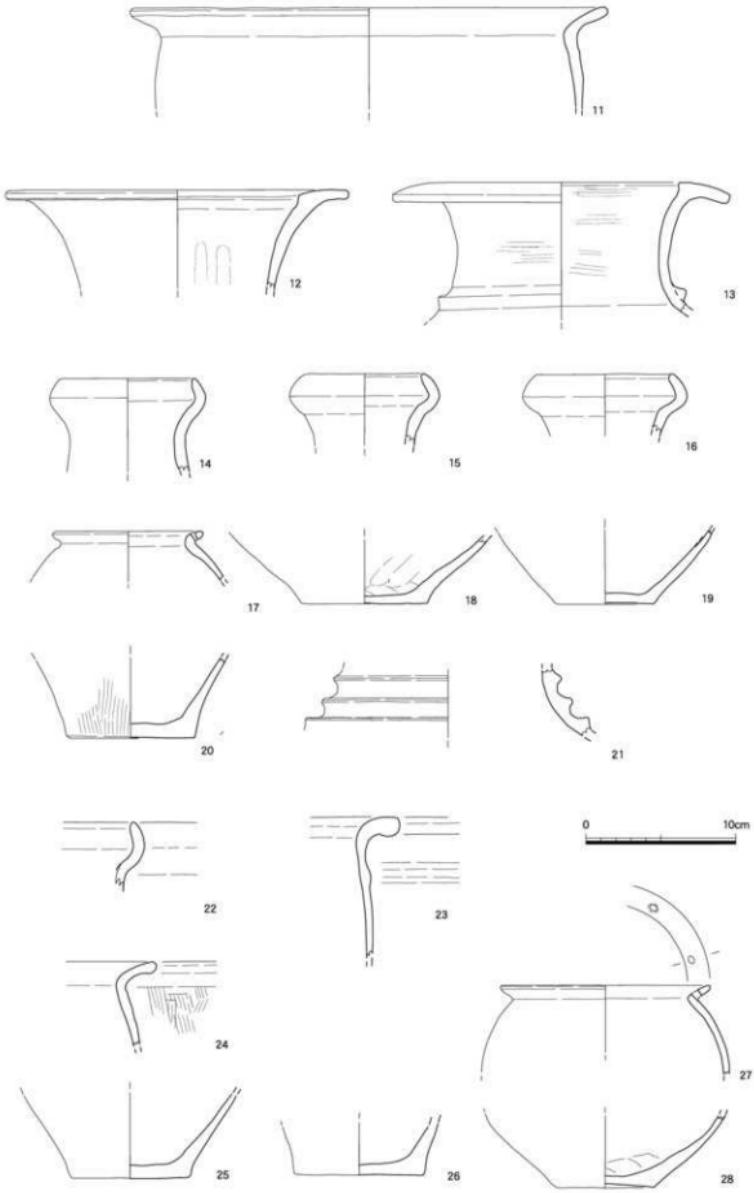


图7. SD002出土遺物実測図 (1/3)

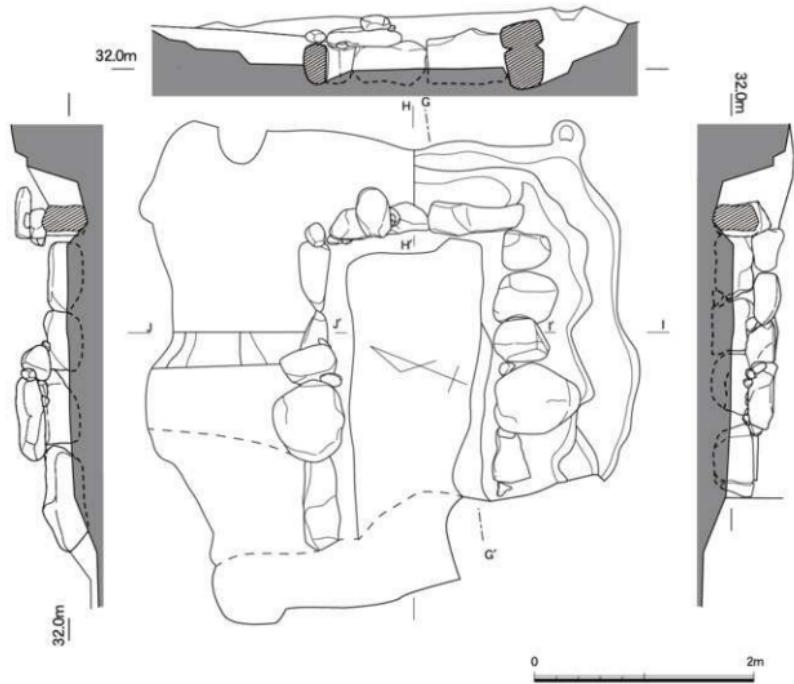


図8. 石室実測図（1/40）

天井部に刺突文がある。3 3は口径14.2cm、器高6.1cm。内外面調整は回転ヨコナデであり、外面の天井部付近は回転ヘラケズリが施されている。つまみ部周辺はヨコナデである。3 4は口径14cm、器高4.9cm。内外面調整は回転ヨコナデであり、内面の天井部はナデ、外面の天井部付近は回転ヘラケズリが施されている。外面は灰かぶりであり、一部が自然釉となっている。3 5は口径11.9cm、器高4.1cm。内外面調整は回転ヨコナデであり、内面の天井部はナデ、外面の天井部付近は回転ヘラケズリが施されている。3 6～4 0は高台付の壊身である。3 7以外のいずれにも脚部の外面にカキ目がほどこされており、方形の透かしは3 6～4 0すべてにおいて3つである。3 6は口径15cm、受身部径14.5cm、底径10.5cm、器高12.25cm。内面は灰かぶりであり、重ね焼きの痕跡がある。受身部下に波状文が施されている。壊部の外面底部付近は回転ヘラケズリ、脚部は回転ヨコナデである。3 8は口径11.7cm、受身部径14.2cm、底径11.2cm、器高11.4cm。壊部分の内外面は回転ヨコナデ、外面の底部付近側面は回転ヘラケズリ、脚部付近は回転ヨコナデ、脚裾部から内面は回転ヨコナデが施されている。3 9は口径12.4cm、受身部径14.6cm、底径cm、器高11.6cm。壊部分の内面の底部付近はナデ、内外面は回転ヨコナデ、外面の底部付近側面は回転ヘラケズリ、脚部付近は回転ヨコナデ、脚裾部から内面は回転ヨコナデが施されている。4 0は口径12.6cm、受身部径15cm、底径10cm、器高11.2～12.05cm。4 1は壺の口縁部から頸部である。口径18.2cm、頸

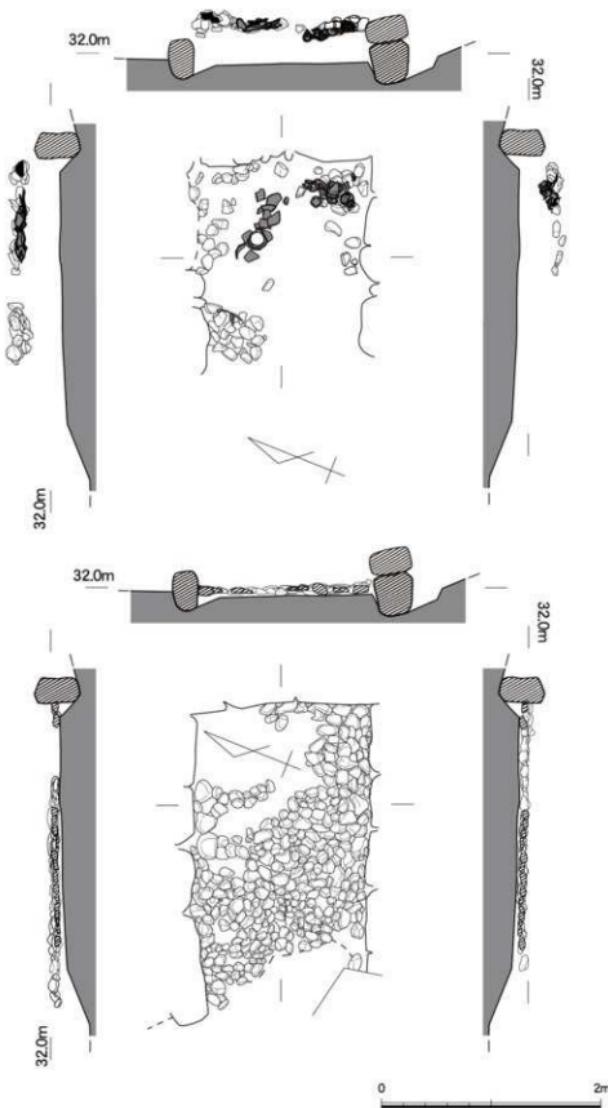


図9. 石室1面・2面実測図(1/40)

石室土層図

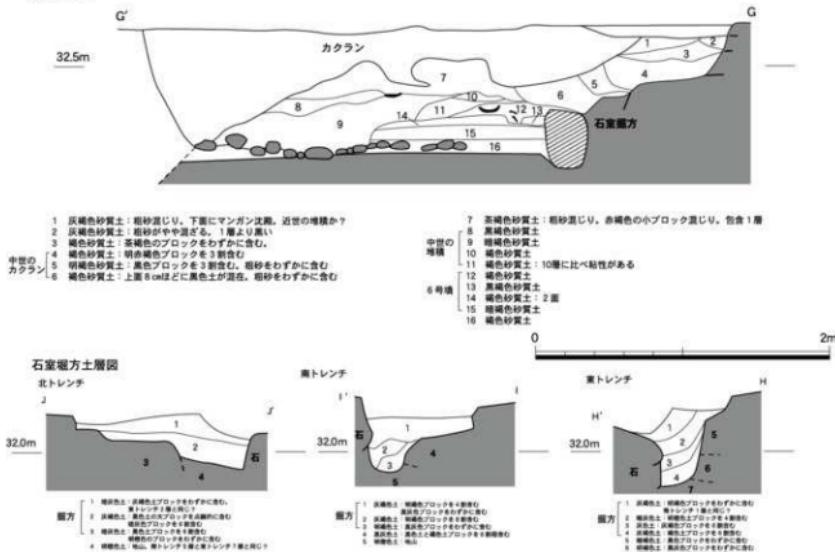


図10. 石室・石室掘方土層図 (1/30)

部径11.25cm、残存高6.5cm。頸部に波状文がみられ、外面の胴部には平行タタキ、内面胴部には青海波の当て具痕がある。42は大甕である。石室北東部で発見された破片を接合したものであり、ほぼ完形である。口径19.4cm、器高37.9cm、最大胴径36.9cm。内面の底部と内面の口縁部から外面の上部までは灰かぶりしており、一部が自然釉となっている。内面は青海波のあて具痕がみられ、外面の底部には格子のタタキがある。43は1面の敷石を除去し、2面へ掘り下げている際に発見された金環である。石室の北東部隅で発見された。直径1.9~2.0cm、厚さ0.2cm、重さ4.61g。

44は袋状鉄斧で、木質の付着はない。45~47は鉄製刀子である。45は茎部に木質が付着する。ハバキは鉄製である。48~51は鉄鎌である。48は短茎三角鎌で、表面に根拠みの有機質が付く。49は頸部、50は茎部、51は頸部から茎部の破片である。52~54は鉄製鋏具である。52は一本の鉄棒で成形し、端部は折り曲げる。53は鋏具の環状部か。54は環状部を欠く。55は鉄製帶金具である。鎌は鉄製で、径1cmを測る。56~60は不明鉄製品である。56は2本の鉄棒を捩じる。58~59は裏面に有機質が付着する。同一個体か。そのうち59は表面に径0.5~0.7cmの鉄製鉗を打つ。49は1面から、50・51は石室内のカクランから発見されており、残りはすべて石室2面からの出土である。

2) 溝

S D O 2 8 (図13)

I区中央部付近で発見された溝である。幅82cm、最深部で約46cmで、ゆるいU字型の断面をとる。西から北東へゆるいカーブをなしており、1号石室にともなう周濠の可能性がある。須恵器が出土した。

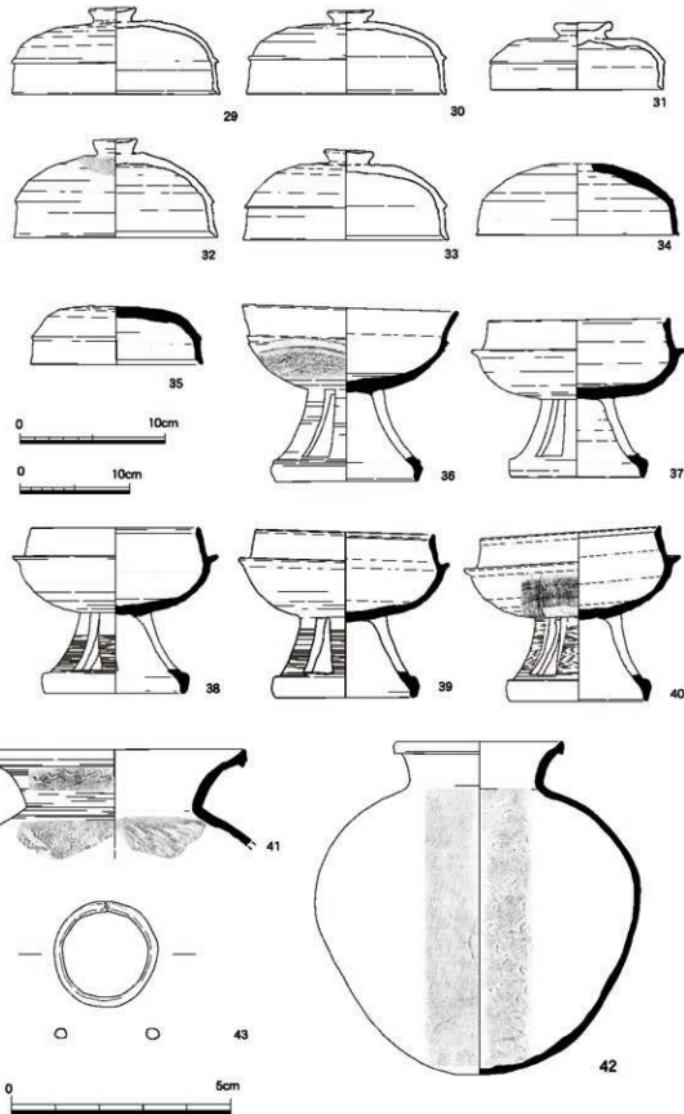


図11. 石室出土遺物実測図 (29~41: 1/3、42: 1/5、43は実寸) ①

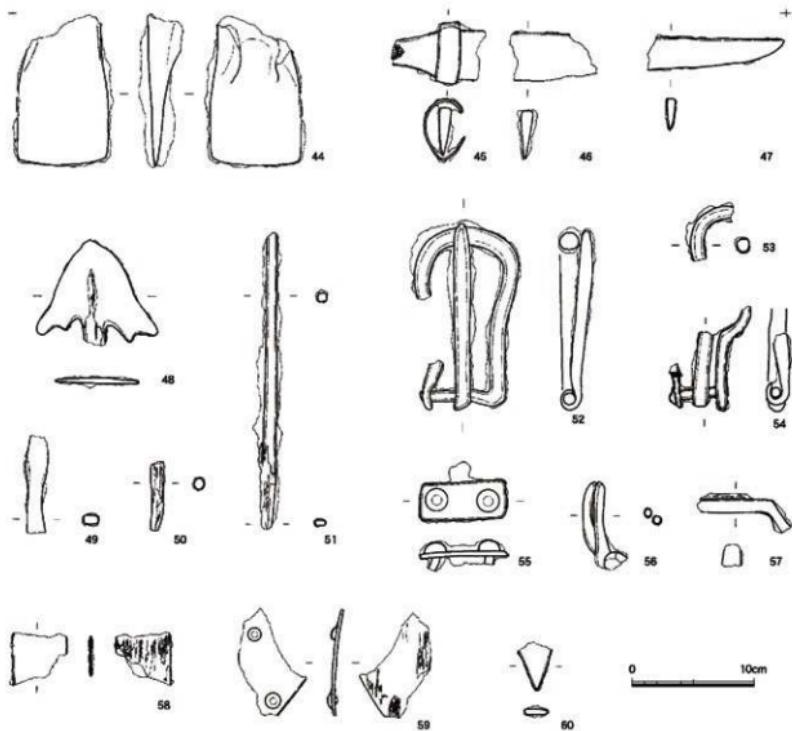


図12. 石室出土遺物実測図②

出土遺物（図15）

S D O 7 7 (図13)
61は須恵器の短頸壺である。褐灰色口径6.9cm、器高8.4cm、最大胴径11.5cm、底径4.0cm。外面内面ともに回転ナデが施されており、外面の底部のみ回転ケズリである。外面に黒変した箇所があり、それが一巡している。

S D O 7 7 (図13)

II区南部で発見された溝である。幅82cm、深さ40.5cm。その位置、向きから古墳の周濠である可能性がある。

S D O 0 0 1 (図3・4)

I区において調査区を南北に縦断するようにはしるU字形の溝である。幅1.0m、深さ0.95m。床面は南から北へ傾斜する。図示できる遺物はないものの、須恵器の破片が出土している。

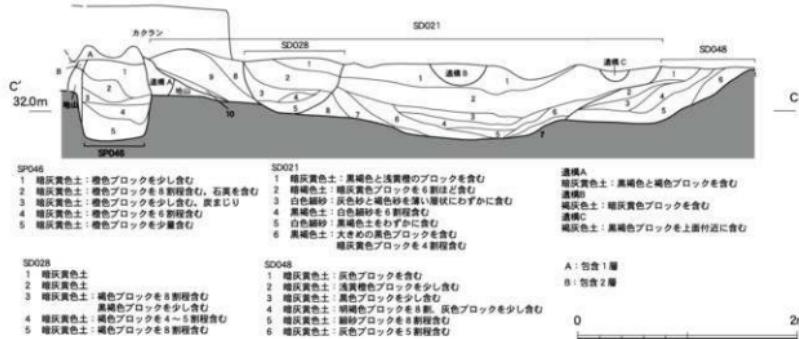


図13. I区調査区中央付近ペルト土層図 (1/40)

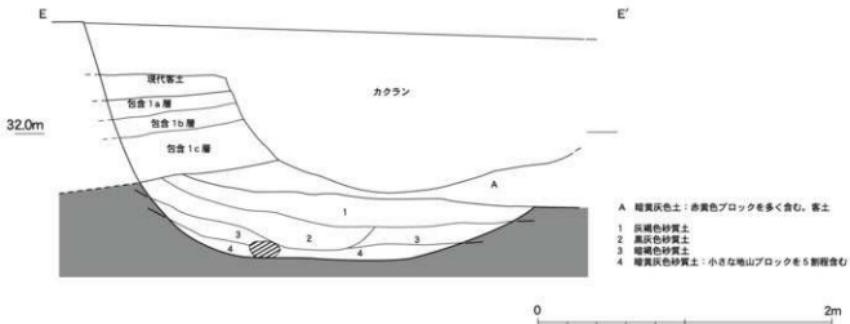


図14.SD077土層図 (1/30)



図15. 溝 (SD021・028) 出土遺物実測図 (1/3)

S D O 2 1 (図13)

I区中央付近で発見された幅4.2m、深さ約60cmの溝である。東部が調査区内で北に屈曲する。S D O 2 8にきかれている。赤焼き須恵器が出土した。

出土遺物(図15)

6 2は赤焼き須恵器の高环の脚部である。残存高10.3cm。2条の沈線がめぐっており、内面調整は回転ナデ。外面調整は摩滅のため不明である。6 3は須恵器の高环の环部分である。残存高3.8cm。内面調整はヨコナデで、底部はナデ。外面調整は回転ケズリである。

3) 穴住居

S C O 1 4 (図16)

調査区I区の中央部やや西よりで発見された方形豊穴式住居址である。長軸2.92m、短軸2.36m、深さ58m。斜面上側に幅 cmの外周溝(S D O 1 5)をもつ。柱穴は壁際に3基確認できた。土層断面から東から埋め戻したものと考えられる。遺物は少ない。

出土遺物(図17)

6 4は土師器の底部か? 底部10.6cm、残存高3.5cm。外面はハケ目で部分的にナデが施されている。内面調整はケズリ。床面で発見された。

S C O 6 1 (図16)

S C O 1 4の下から発見された長方形の豊穴住居址である。残存長軸3.2m、残存短軸2.1m、深さ16~44cm。住居址の北部でかまどの残骸らしき形跡を発見している(図面の斜線部分)。

4) 壺棺

S T O 2 9 (図18)

S D O 2 1を切る形で発見された壺棺墓である。長軸83cm、短軸69cmの二重の円形土坑に古墳時代初頭の土師器二重口縁壺を埋置する。S D O 2 1の時期は古墳時代中・後期であり、時期が逆転している。主軸はN-60°-E。二重口縁壺の中で土器片が立っている形で発見され、乳児もしくは頭部のみを囲っていた可能性がある。また壺の底部付近には管玉、勾玉、小玉などの玉類も收められており(図18の黒塗り部分)、周辺には朱が塗布されていた(図18のアミカケの範囲)。

出土遺物(図19・20・21、表1)

6 5は壺棺の壺である。器高57.4cm、最大胴径43.2cm、口径24.2cm。ほぼ完形で出土した。内外面調整はともにタテハケであり、内面の底部付近はケズリが施されている。ところどころに黒斑がみられる。6 6は6 5の壺の中で発見された土器片を接合し、復元したものである。壺、もしくは壺の底部か? 最大胴径31.8cm、残存高20.2cm。外面調整タテハケ、内面調整ケズリ。外面に黒斑がみられ、打ち欠けがある。復元すると6 6の壺の中に入れることができることが判明したことから、土器を意図的に破壊したのちにその破片を壺の中にいたるものと考えられる。6 7~1 4 1は壺棺の中で発見された玉類である。6 7~8 3は小玉、8 4は管玉、8 5~1 4 1は勾玉である。玉類は蛇文岩系、もしくは蠍石系かと思われる。勾玉はおおまかに1.2cm以下のものと1.3cm以上のものにわけられるか。詳細は表1を参照されたい。

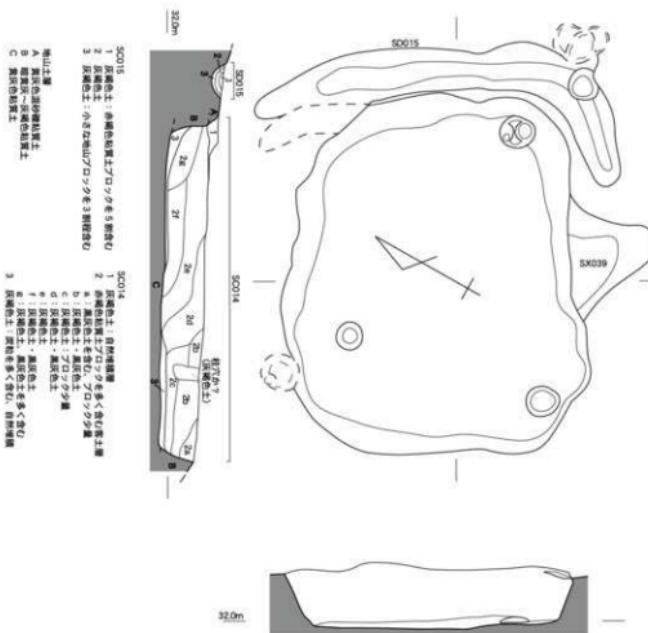
古代・中世

I区において古代の焼土坑が3基発見されている。またI区西端において中世の溜め池と思われる遺構が確認された。

1) 焼土坑(図22)

調査区内で3基の焼土坑が見つかった。いずれも木炭は残っていない。

SC014



SC061

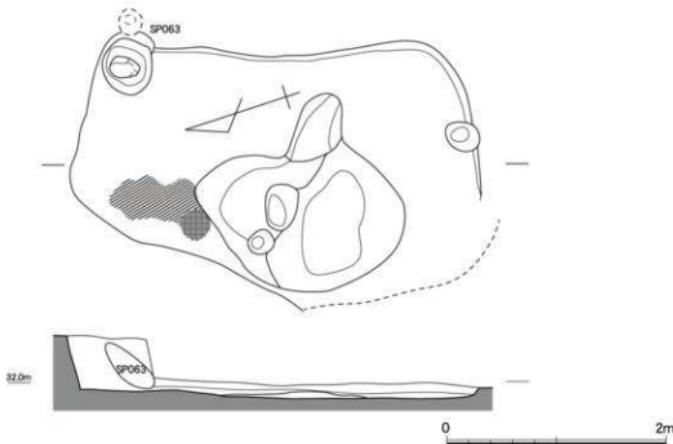


図16. 竪穴住居（SC014、SC061）遺構実測図（1/40）

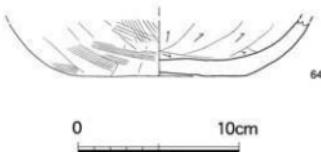


図17. S C 0 1 4 出土遺物実測図 (1/3)

S K 0 0 3

I 区中央からやや西よりで発見された長方形土坑である。長軸1.04m、短軸0.81cm、最深部28cm。S C 0 1 4 の上からの検出である。壁が厚く焼けている。

S K 0 1 2

I 区中央からやや北で発見された長方形土坑で、壁面の焼土は大部分が剥落している。全体的に掘りすぎている。長軸1.48m、短軸0.89m、深さ30cm前後。S D 0 2 8 の上からの検出である。

S K 0 2 4

I 区のほぼ中央で発見された長軸74cm、短軸520m、深さ22mの小型の長方形土坑である。一部に壁面焼土が残存する。一部を掘りすぎている。

2) 不明遺構

S X 0 1 1 (図23)

I 区調査区の西側において発見された遺構である。土層から滲水していたものと考えられるため、溜め池であった可能性がある。完掘はしていないものの、トレーナーから深さ72cm以上になると思われる。

出土遺物 (図23)

142は朝鮮象族青磁である。塊の口縁部片と思われる。口縁部付近に2本の沈線が施されている。

その他

1) 土坑

調査区II区において時期不明の廃棄土坑が1基見つかっている。

S K 0 8 2 (図24)

調査区II区の北東隅で発見された製鉄炉廃棄土坑である。炉壁の痕跡があり、鉄滓も見つかったことから製鉄関連の遺構である可能性が高い。包含1層下からの検出であり、1次調査例から古墳時代中期のものである可能性がある。

2) 包含層出土遺物 (図25)

調査区の西側に堆積している包含層から出土した遺物である。

143～145は包含1層から出土したものである。143は白磁碗IV類の口縁部片である。残存高3.0cm。釉調は灰オリーブ。144は同安窯系の青磁皿である。口径11cm、器高1.9cm、底径6.0cm。釉調はオリーブ黄。145は繩文時代の蛤刃石斧である。長さ13.5cm、幅4.8cm、厚さ3.3cm。頁岩製か? 146は繩文後期横刃石器と考えられる。安山岩製。縦6.3cm、横10.05cm、厚さ1.7cm。包含2層からの出土である。

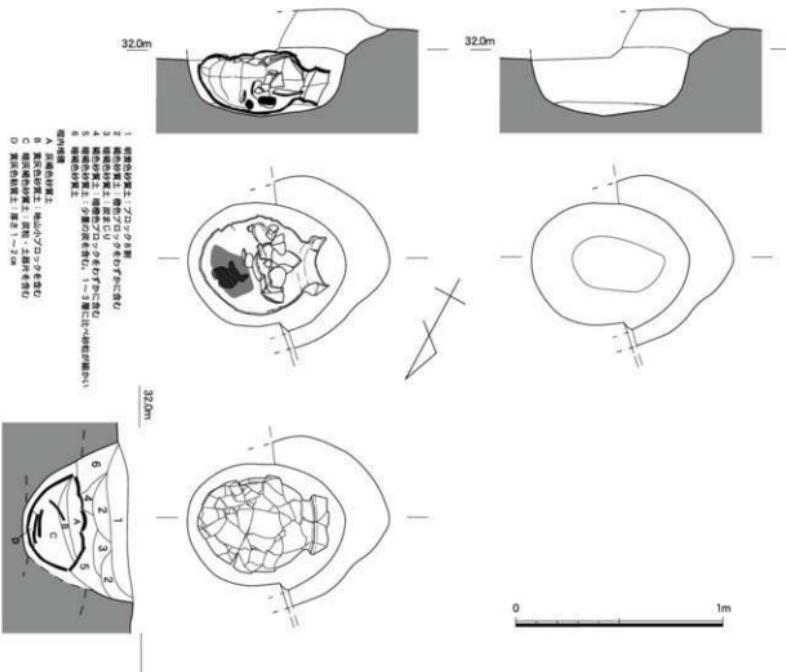


図18. STO 29 遺構実測図 (1/20)

IV. まとめ

6号墳について

今回発見された石室は出土した須恵器や1次調査で発見された5号墳と類似する石室形態などから同時期の築造であると考えられる。1面目は出土遺物が少なく、時期を判断することは難しいが、2面から掘り下げる際に出土した金環から考えて5世紀前半とみられる。2面目は出土した須恵器などから5世紀後期後半には追葬がされたものとみられる。またクエゾノ古墳群が渡来系との関与が推定されていることから、6号墳も同様であると考えられる。

壺棺について

I区のほぼ中央付近で発見された壺棺(STO 29)は前述したようにSDO 21を基る形で発見された。SDO 21は出土遺物に弥生土器の破片などを含むが、下層からでた高壙や6号墳の周溝と考えられるSDO 28にきかれていることから判断すると、古墳時代中期後半には少なくとも埋没していたものと考えられる。一方で壺棺に使用されている壺の時期は新しくても古墳時代中期前半くらいであろう。以上

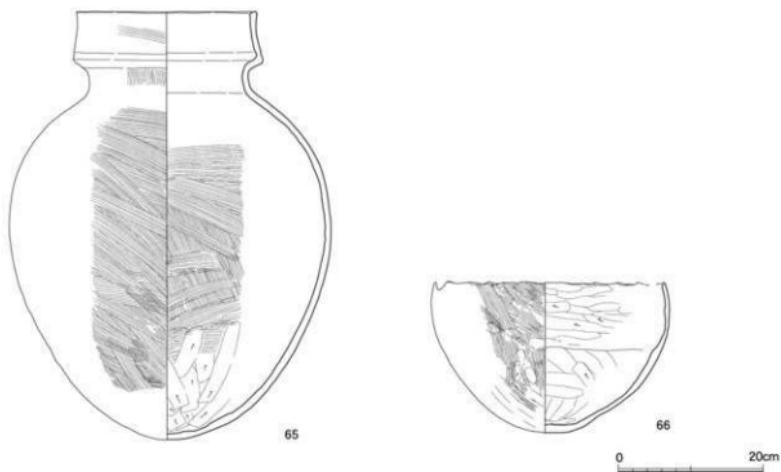


図19. STO29出土遺物実測図（1/6）

のことから遺構の時期と使用されている壺の時期に矛盾が生じていることがわかる。その理由としては①別の場所に埋葬されていた壺棺を当該箇所へと移動させて再度葬った再葬の可能性②古い時期の壺をどこからか持ってきた後に埋葬に使用した可能性の二通りが主にあげられるであろう。前者に関しては、今回発見された壺の内容物である土器片の状態を見ても、別の場所から今回発見された場所に埋葬しなおした可能性は低いと考えられる。以上から、後者である②古い時期の壺をどこからか持ってきた後に埋葬に使ったという可能性のほうが妥当であろうか。しかしながら古い時期の壺を埋葬に使用したのか等といった理由は不明である。

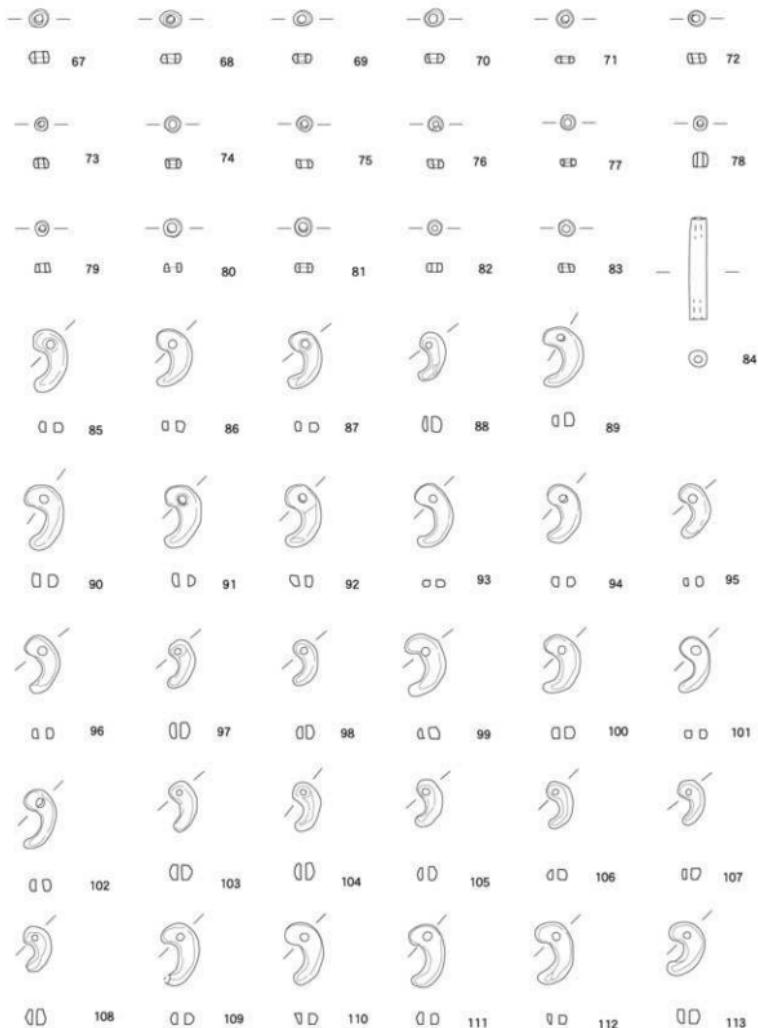


図20. S T O 2 9出土玉類実測図① (1/1)

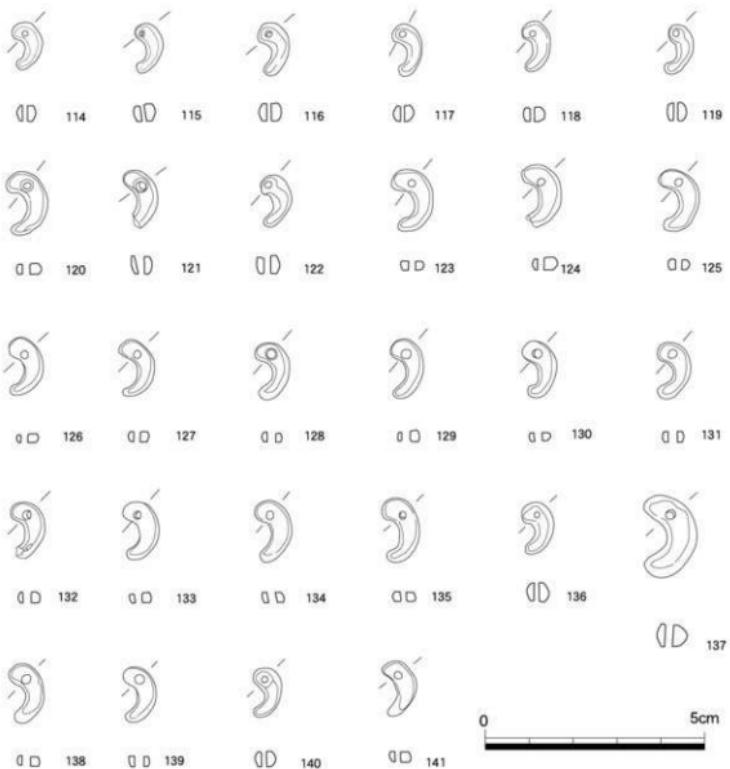


図21. STO29出土玉類実測図② (1/1)

小玉

No.	直径 (mm)	厚さ (mm)	色	等級方角	No.	直径 (mm)	厚さ (mm)	色	等級方角
65	1.0	2.0	黒	-	70	2.5	2.5	2.5	2.5
66	4.5	2.5	赤褐色	-	71	2.7	1.8	1.8	1.8
68	5.0	2.4	オーラー	-	70	2.0	3.1	3.1	3.1
70	4.5	2.5	オーラー	-	70	3.5	2.1	2.1	2.1
71	4	1.0	オーラー	-	80	4.2	2.5	2.5	2.5
72	4.0	2.5	オーラー	-	81	4.0	1.8	1.8	1.8
73	2.5	2.5	暗紺灰	1	82	3.6	2.5	2.5	2.5
74	2.5	2.5	暗オーラー	1	83	6	1.8	1.8	1.8
75	1.0	1.0	オーラー	-					

管玉

No.	外径 (mm)	上端内径 (mm)	下端内径 (mm)	最大直径 (mm)	色
54	2.35	0.75	0.45	0.45	白

勾玉

No.	全長 (mm)	厚さ (mm)	色	等級方角	No.	全長 (mm)	厚さ (mm)	色	等級方角
83	1.45	0.25	赤オーラー	1	104	1.15	0.35	赤	1
84	1.32	0.18	暗紺灰	1	105	1.05	0.32	暗紺灰	1
87	1.30	0.25	赤～墨	1	106	1.1	0.35	赤	1
88	1.1	0.25	暗紺灰	1	107	1.05	0.27	暗紺灰	1
89	1.0	0.25	オーラー	1	108	1.05	0.35	暗紺灰	1
90	1.5	0.25	暗紺灰	1	109	1.05	0.25	暗紺灰	1
91	1.44	0.55	暗紺灰	1	110	1.45	0.35	暗紺灰	1
92	1.45	0.25	暗紺灰	1	111	1.45	0.25	暗紺灰	1
93	1.45	0.25	暗紺灰	1	112	1.45	0.25	暗紺灰	1
94	1.35	0.25	暗紺灰	1	113	1.25	0.35	暗紺灰	1
95	1.25	0.25	暗紺灰	1	114	1.15	0.35	暗紺灰	1
96	1.35	0.25	暗紺灰	1	115	1.15	0.35	暗紺灰	1
97	1.15	0.25	オーラー	1	116	1.25	0.45	暗紺灰	1
98	1.05	0.25	暗紺灰	1	117	1.25	0.35	暗紺灰	1
99	1.42	0.25	暗紺灰～暗紺灰	1	118	1.15	0.25	暗紺灰	1
100	1.35	0.25	暗紺灰	1	119	1.15	0.45	暗紺灰	1
101	1.25	0.25	暗紺灰	1	120	1.45	0.25	暗紺灰	1
102	1.35	0.25	暗紺灰	1	121	1.35	0.42	暗紺灰	1
103	1.15	0.25	暗紺灰	1	122	1.45	0.45	暗紺灰	1

表1. STO29出土玉類実測表

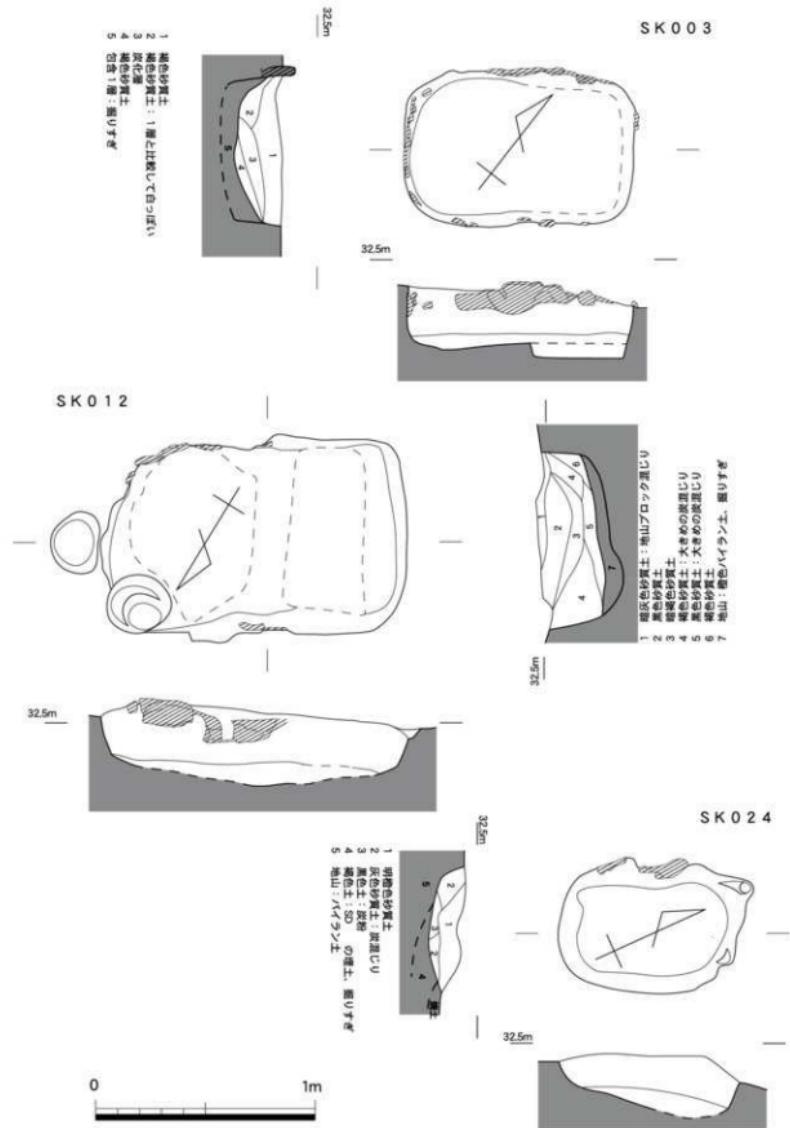
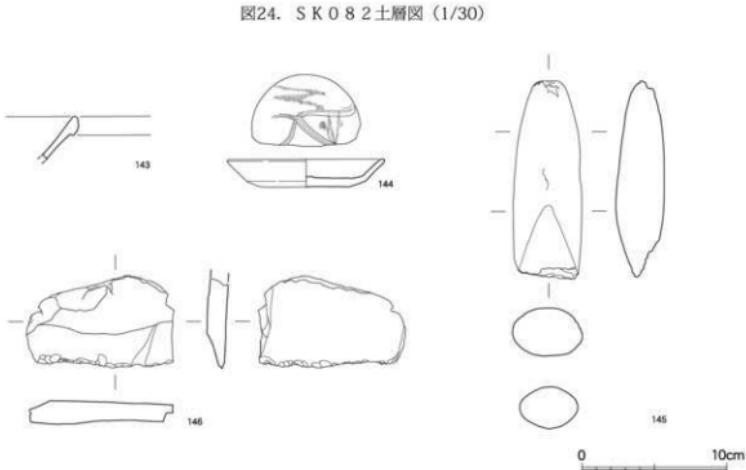
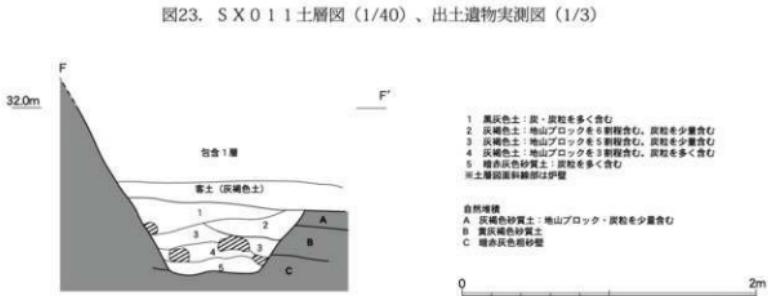
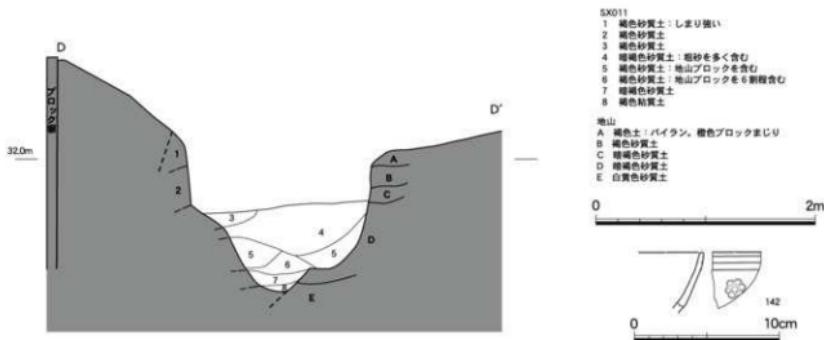


図22. 焼土坑（SK003、SK012、SK024）遺構実測図（1/20）



図版



図版 1



1. 調査区Ⅰ区全景（北より）



2. 調査区Ⅰ区全景（南より）



1. 石室1面（西より）



2. 石室2面（西より）

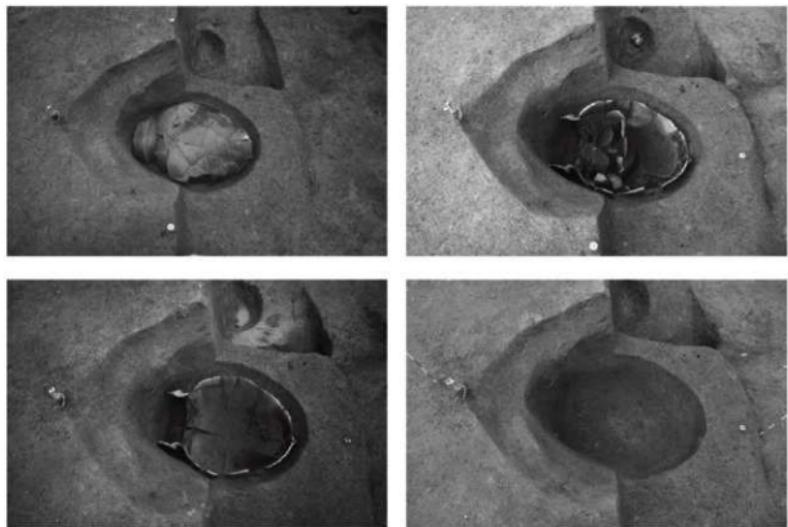
図版 3



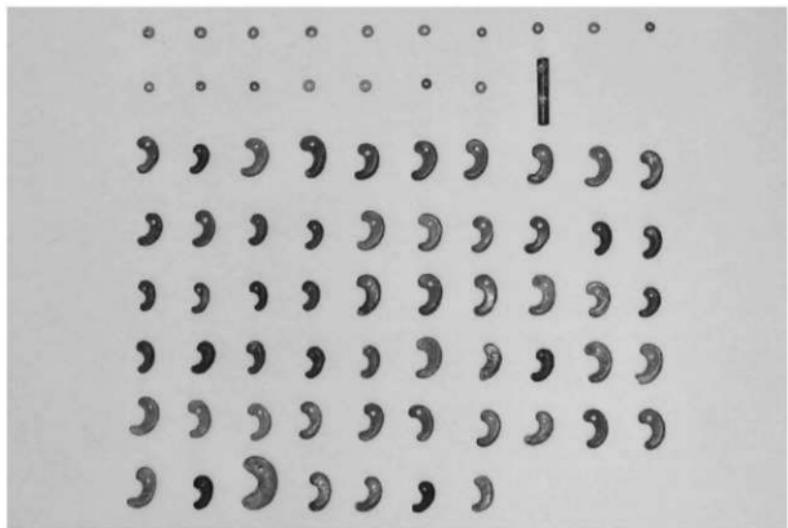
1. 石室完掘（西より）



2. 調査区Ⅱ区全景（北より）



1. ST029 (南より)



2. ST029出土玉類

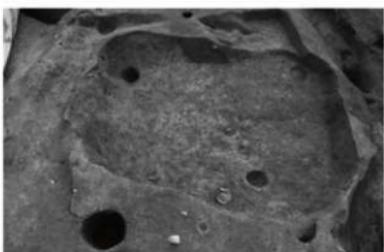
図版 5



1. 調査区中央ベルト



2. SC066 (南から)



3. SC014・SD015 (北から)



4. SC061 (西から)



5. SK082 (北東から)

報告書抄録

ふりがな	くえぞのいせき 3							
書名	クエゾノ遺跡3							
副書名	—第5次調査報告—							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1440集							
編著者名	三浦 茜							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号							
発行年月日	2022年3月24日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
くえぞのいせき クエゾノ遺跡	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 さわらくじめばやし 早良区梅林 7ちょうめ 7丁目 145	40173	0260	33度 32分 26.3秒	130度 21分 05.23秒	20191125 ～ 20200214	208.316 m ²	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
クエゾノ遺跡	古墳・集落	弥生・古墳	石室、竪穴住居、 壇棺、溝	弥生土器、須恵器、土師器、 玉類、鉄器			5世紀代の石室の発見	
要約	<p>クエゾノ遺跡は油山からのびる丘陵上に位置する縄文から中世にわたる複合遺跡である。周辺の代表的な遺跡としては西に野芥遺跡、北に飯倉A～H遺跡、東に梅林遺跡などが存在する。今回の第5次調査区は当該遺跡内の中央よりやや南東に位置する。</p> <p>今回の調査では主に石室1基と古墳時代と思われる住居址2基、弥生時代と古墳時代の溝が各1条、古代もしくは中世のものと思われる焼土坑が数基、古墳時代初期の壺を埋めた土坑などさまざまな遺構が確認されている。出土遺物としては主に石室内から須恵器・鉄器・金環が、土坑から発見された壺からは多量の玉類が発見されている。</p> <p>石室にともなう遺物から、当古墳は当該地域における首長級の人物が葬られた可能性が非常に高い。また1次調査区から離れた場所においても古墳が発見されたことから、今後近隣地域で発掘を行う際は古墳の存在を念頭に置いておく必要がある。</p>							

クエゾノ遺跡3

—第5次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1440集

2022（令和4）年3月24日

発行 福岡市教育委員会

〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1

印刷 株式会社 ハザマ印刷

〒815-0081 福岡市南区那の川1-20-23

